

## 耕論「リーダーに求める」

表題と写真は、朝日新聞 6 月 3 日の耕論である。3 人が「リーダー」について論じているが、ノンフィクション作家の保阪正康さんの「論」に共感するところが多かった。一部割愛して紹介しておきたい。

リーダー、とりわけ政治指導者の劣化が指摘されて久しいですが、昭和から現在に至るまで、日本のリーダーが超大国である米国との関係をどう築くかは、自らだけでなく国家の浮沈に直結しました。



しかし、対米関係だけでリーダーの命運が決まってしまうのは極めて偏っています。昭和の時代を改めて思い起こしてみれば、自分の頭で考え抜き、最善の「解」を実現するために、身を挺して行動したリーダーがいました。親米一辺倒より国連中心主義、軍国主義より小日本を構想した石橋湛山元首相や、平和と民主主義の「護民官」を生涯務めた後藤田正晴元官房長官らがそうです。彼らは「米国の時代」にこびず、流されず、ぶれませんでした。広く情報を集め、現実に根ざした正確な歴史観を持っていました。だから安全保障や国のかたちをどうすべきかで、自分なりの座標軸を持つことができたのです。

安倍晋三首相はどうでしょうか。集団的自衛権行使容認など同盟強化の熱心さでは、米国との関係を政治の中心に据えているようです。しかし、必ずしも米国の意向と一致させようとはしていない「変わったリーダー」でもあります。安倍さんの歴史認識を巡って、米国のリベラル派だけでなく、保守派にも反発があります。大量の戦死者を出してファシズムと戦ったのが誇りの国です。靖国神社に参拝して「戦没者に尊崇の念を捧げる」のは、彼らの琴線に無自覚に手を突っ込むことです。4 月末の米議会演説では「痛切な反省」を述べましたが、謝罪はしませんでした。とても危なっかしく見えますが、国民の多くは彼を高く支持し、時に喝采しています。国民が歴史に無自覚で、傷つけられた側への感性が劣化しているからでしょう。

いま、石橋や後藤田のようなリーダーを持たないのは、私たち国民が、自ら考え抜くことより、勇ましさを格好よさを優先させるからでしょう。知性が乏しい社会には真のリーダーは育ちません。

この「論」に共感したのは、安倍首相だけでなく、橋下大阪市長のことが頭にあったからだ。「橋下現象」なるものに長らく注目してきた。それを支えるものとして、保阪さんがいう「知性が乏しい社会」があるのではないか。今後も考えていきたい。

(2015 年 6 月 7 日)